

# 北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.35

⇒ をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 学問における  
カント的批判精神の今日的意義

松本 和彦  
(副学長・学術資料部長・未来創造学部教授)

利用学生の声

⇒ 読書を通じて

栃原 龍宏  
(薬学部 薬学科 4年次生)

⇒ 平成25年度学術資委員紹介

⇒ 本に生きる

毛利 祐一郎  
(未来創造学部 国際マネジメント学科 3年次生)

⇒ 寄贈図書

⇒ 目次



## 学問におけるカント的批判精神の今日的意義

副学長・学術資料部長・未来創造学部教授 松本 和彦



我々が自分のことを「ぼく」「わたし」と呼び始めたのは幼児期のいつの頃からだったであろうか。言い換えれば、我々がエゴ（自己）を表象することができるようになった時期はいつかという問題である。今それを思い出すのは難しいであろう。

エゴイズム（自己中心主義）が芽生えるのは、人間が「私」という一人称の言葉を使って自分を客観化し、他者の存在を前提として語り始めたときである。その後も成長するにしたがって巧妙に、謙遜と謙虚さを装っていればいるほど他人のエゴイズムの抵抗に晒されることなく、それだけいっそう確実にエゴイズムは押し出され昂進していくものである。

これは、カント（ドイツの哲学者、1724-1804）の最晩年の著作である『実用的見地における人間学』（1798年）第1部「人間学的な教訓論—人間の内面および外面を認識する方法について」第1篇「認識能力について」第2節「エゴイズムについて」の冒頭で述べられている文章を筆者なりに要約したものである。エゴイズムにも個人の性格と同じようにいくつかの類型が呈示される。

カントはかれの講義の底本とした著書の影響を受けながらも、社交界や論壇における経験も踏まえ、その鋭い洞察力による人間観察に基づいて独自に3つのエゴイスト（自己中心主義者）像を抽出した。そしてそれぞれに対してかれが樹立した批判哲学の立場から論評を加えている。

第1に挙げられているのは、論理的エゴイストである。論理的エゴイストとは、自分の判断を他人の悟性（概念による認識能力、いわゆる知性）の観点からも検討してみることを無用とみなし、まるでこの試金石（真理の外的基準）をまったく必要としないかのごとき人のことである。これは、悟性の視点から見た独断主義者・独善主義者と言われる人物像である。しかし言うまでもなく、我々の判断の真理性・正当性を吟味し、確認するための手段として、この真理の外的基準は必要不可欠であり、これがなければ我々は誤謬に身を晒すことになる。だからこそカントは、「学問に携わる臣民がいかに切実にペン<sup>ペン</sup>の自由を求める」叫びをあげているのかのもっとも核心的な理由はこの試金石にあると強調した。

第2に挙げられているのは、美感的エゴイストである。美感的エゴイストとは、たとえ他人がかれの詩や絵画や音楽などをどんなに悪評し、非難し、あるいは嘲笑<sup>ちやうしやう</sup>をすらしめていようとも、自分独自の趣味にすっかり自己満足している人のことである。これは、感性の視点から見た独断主義者・独善主義者と言ってもよいであろう。カントの批判哲学においては、趣味判断は主観的ではあるが、同時に普遍妥当性を要求するからである（『判断力批判』1790年）。この種のエゴイストは、芸術美の試金石を自分のうちにしか求めず、自分の判断だけに固執し、自画自賛し、さらに上のレベルへの道を自ら閉ざすことになる。ここで使用されている「美感的」という言葉は、「快・不快の感情による」という意味である。

最後に挙げられているのは、道徳的エゴイストである。道徳的エゴイストとは、あらゆる目的を自分自身に関係づけて、自分に役立つこと以外のものには何の益も認めない人のことである。かれらはまた幸福主義者として、自分にとっての有用さと幸福にのみ、自分の意志の最上の規定（決定）根拠を置いて、義務の表象には置くことがない。これは、実践という視点から見た独断的・独善的幸福主義者とも呼ばれるべき人物像である。かれらは、自分に有益なものや自分の幸福しか念頭になく、真の義務概念（端的に「～すべきである」「～すべきではない」という法式で表される無条件的命法）という試金石などまったく不要とし、エゴイズムこそが普遍妥当的原理になるのが当然であると考えている。カントの実践哲学は、我々の行為の主観的原理である格率がつねに同時に普遍的立法の原理とみなされるように行為せよ、と要求している。これが道徳法則であり、格率の普遍化可能性の

試金石となる（『実践理性批判』1788年）。

これら3つのエゴイスト像は特段新奇なものではない。ひと言で言えば、いずれも理性の独りよがり、うぬぼれ、自己欺瞞である。理性とは、人間の認識のはたらしにおいて最上位に位し、思考の最高の統一をもたらす能力であり、「原理」の能力と規定されるものである。人間はどんなに公平無私に努めようとも、有限的な理性的存在者である限り、エゴイズムの呪縛から完全に逃れることはできないのかもしれない。しかしだからと言って、その現実を直視し受け入れるといった現実主義者に留まってはならない。

ところで筆者が興味を抱いたのは、これらがいずれも「越権」行為を含んでいると、カントが捉え指摘している点である。つまり、カントの言葉を借りれば、悟性の越権、趣味の越権および実践的関心の越権である。ではこれらエゴイズムの越権を我々はどうのようにして克服することができるのであろうか。カントはひとつの示唆を与えてくれる。それは多元（複数）主義的立場であり、世界市民主義的立場と同じ意味で使用されている思考法である。

エゴイズムに対置できるのは、多元主義だけである。すなわち、全世界を自分自身の中に包み込んでいるのだと思いながら振る舞うというのではなく、自分を単なる一世界市民とみなし、そのように行為する考え方のことである。これがカントの回答である。多元主義について論じるのは人間学の領域外であるとして、カントはこれ以上語らない。わかりやすく言えば、我々が異なった複数の観点や考え方を相互に認め、自らもそれらに立脚し、自己を他者の立場にも置いて考える思考法である。カントはこれを「自己を拡大する思考法」と呼んだ。

この越権という法律用語はすでに『純粹理性批判』（1781年）の中でも使用されている。この主著の論述のいたるところに法律学的思考法が見出され、他の法律用語と同様に越権にも重要な意味が与えられている。カントは当時の形而上学（物事の背後にある原理を追求する学問）の現状について次のように述べている。

はじめは形而上学の支配は独断論者たちの管轄のもとにあって、専制的であった。しかしながら、その立法はまだ古代の野蛮さの痕跡をそれ自体において帯びていたので、この支配は内戦によって次第に完全な無政府状態に退化した。また大地の不断の開墾一切を嫌がる一種の遊牧民たる懐疑論者たちは、ときおり市民的同盟を解体した。（同書第1版序言）

独断論者と懐疑論者との間のこの果てしない抗争の戦場である形而上学の分裂状態を克服し、「永遠平和」（『永遠平和のために』1795年）に到達する道はあるのだろうか。それを解決・実現するために、カントは理性に対してひとつの法廷を開設することを要請する。この理性に対する要請とは、

理性のあらゆる業務のうちで最も困難な業務、つまり自己認識という業務をあらためて引き受け、一つの法廷を設けよという勧告である。この法廷は、理性の要求が正しい場合には理性を護り、これに反してすべての根拠のない越権を、強権の命令によってではなく、理性の永遠不変の諸法則にしたがって拒むことができるものであるが、だからこの法廷こそ純粹理性の批判自身にほかならないのである。（同上）

カントはここで批判という言葉、書物や体系の批判という意味で用いているのではない。カントは「理性が、あらゆる経験からは独立にそこに到達しようと努力するであろう全認識に関する理性能力一般の批判」という意味で用いている。つまり、あえて類比的にいえば、3つのエゴイズムの越権を越克するためには、我々は独断論や懐疑論に陥ってはならない。我々人間が備えている純粹理性の自己批判を通して形而上学一般の可能性ないしは不可能性を決定し、またこの形而上学の源泉ならびに範囲と限界とを規定しなければならない。これらすべてのことは原理に基づいてなされる。しかし、我々の理性能力を理性能力自身によって吟味し、理性的認識の源泉ならびに範囲と限界とを画定することは容易なことではない。では、現在の我々にとってカントの理性批判はどのような意義をもっているのであろうか。

理性批判の機能を現代的に解釈し直すと次の2点が重要である。第1に、理性は独裁者的威信をもつのではなく、理性の発言はつねに「自由な市民の一致した意見に他ならない」。第2に、市民の各人は、自分の疑念を、それどころか「自分の拒否権を躊躇せず表明」できなければならない。（第一線のカント哲学研究者である牧野英二氏の指摘による）

最後にカントの批判的精神が簡潔・明瞭に表明されている有名な文章を紹介したい。

現代は真の意味での批判の時代であって、すべてのものが批判に服さざるをえない。宗教はその神聖によってまた立法はその尊厳によって、通例はこの批判をまぬかれようと欲する。しかしそのときには宗教も立法も、おのれに対する当然の疑惑をよびおこし、偽らざる尊敬を要求することはできないのであって、そうした尊敬を理性は、理性の自由な公然たる吟味に耐えてくることのできたもののみ認めるのである。（同上）

この主張は230年以上も前になされたものだが、このカントの批判的精神の今日的意義はますます高まっている。学生諸君も現在さまざまな問題に直面しているだろうが、カントの批判主義を不断に遂行し、その問題を解決する試みを行うことは重要であろう。

## 利用学生の声

### 読書を通じて

薬学部 薬学科 4年次生 栢原 龍宏



私は読書をするには本を通じて、著者の考えや思いを感じとることだと思っています。本の中には、著者のこれまで体験してきたことや学んできたこと、考えたことなどを様々な表現を用いて表してあり、それを読むことで新たな発見、違う目線からの考え方など様々なことを学ぶことができると思います。

今でこそ本を読むようになりましたが、昔は読書という言葉とはほとんど無縁の状態でした。そんな私が本を読むようになったのは、高校時代の部活動での怪我がきっかけでした。怪我をして落ち込んでいた私に、先生が一冊の本を渡してくれました。その本は、私の尊敬する選手のこれまでの体験について書かれていたものでした。最初のころはただ字を眺めているだけでしたが、ページを進めて行くと今の自分と似たような状況になったときのことが記載されており、その時の気持ちがすごく共感でき、そこから夢中でその本を読みました。「怪我をすることは決して悪いことでなく、むしろ自分の弱い所が発見できた。」「この怪我を機会に、もう一度自分を鍛え直しさらに上を目指そう。」という内容が書かれていました。この時の自分は怪我をすることは悪いことだ、仲間にも迷惑をかけてしまう、自分だけ取り残されみんながどんどん先に行ってしまうと思っていました。しかし、この本を読んでその思いが変わり、今の自分にできることは何かを考え新たな目標に向かい歩み出すことができました。その後もその本を繰り返し読み直し、新たな発見や考え方を知ることができました。この体験から今度は違う選手の本も読んでみたくなり、部室においてあった本を借りては読んでいました。多くの選手の本を読んで、それぞれの選手の思いや考え方などを知ることによって視野を広くすることができました。高校での最後の大会が終わるまで何度も壁にぶつかりましたが、その都度自分に向き合いながら進むことができました。

引退後は部活に関係のある本ばかりでなく、違う分野の本や小説なども読むようになりました。様々な分野の本を読んでみて、自分がこれまで見ていた世界とはまた違った世界のことを知ることができ、初めて知ったことや、自分たちと同じような思いを持っていることを知ることができました。小説も色々な作品を読み、作者のしている世界や考えを感じることができました。あまりにも読むのに集中してしまい、買ってきただけに最後まで読んでしまうこともありました。

大学に入学してからも、時々昔買った本を読み返したり、図書館に行って気になった本を借りて読んだりしています。本を通じて今までの自分にはなかったものを感じ、学ぶことで、新しい発見や視野を広くすることができました。

今後も新たな発見をし、自分の知識の財産とできるように図書館を活用して、多くの本に出会っていきたいと思います。

### 平成25年度学術資委員紹介

松本 和彦	学術資料部長、紀要編集委員長
田中 康友	副委員長、読書感想文コンクール審査委員
安田 優	読書感想文コンクール審査委員長
井上 裕子	紀要編集委員
加藤 幸子	読書感想文コンクール審査委員
東 安彦	紀要編集委員
毎田千恵子	紀要編集委員

副学長、未来創造学部教授
未来創造学部准教授
未来創造学部准教授
未来創造学部准教授
薬学部講師
薬学部講師
薬学部助教

## 本に生きる

未来創造学部 国際マネジメント学科 3年次生 毛利 祐一朗



ソーシャルネットワークサービスの普及が、日本人の読書離れに拍車をかけている。またそれに伴い出版業界が肩身の狭い思いをしているのは間違いない。液晶ディスプレイに昼夜問わず向き合い、無機質な画面からは感情を持たない活字が絶え間なく流れ込む。無論、電子技術の発展が我々に与える恩恵は否定しがたく、今ではSkype、Lineなどの様々な媒体によってコミュニティを形成し、容易に連絡を取ることが他愛もない。加えてインターネットを通じ新聞購読、選挙活動も可能だ。出版業界においても電子技術の波が押し寄せていることは言うまでもない。

一方で我々は読書そのものがネット世界へ身を投じることを容認し、利便性ばかりを重んじる。電子で構成された活字から筆者の想いを感じることが果たして出来るのだろうか。実際にページを捲り文章を読むことで初めて本の良さに気が付くはずだ。彼らが活字に託した気持ちは縦横無尽に駆け巡り極彩色あふれる印象を与えてくれる。本もまた我々人と同様、産声を上げ歴史を刻み晩年を迎える。感動、歓喜、哀愁、時には涙によってそれぞれ個性を持ち多彩な表情を垣間見せてくれる。五感で彼らを受け入れること、それこそが書冊を好む決定打だ。

読書は人それぞれに感じ方があり、思う気持ちも千差万別である。読書とはそういうものであり、そういうものであってほしい。

「なぜ読書をしなければならないのか。」「本を読む機会がない。」そんな問いが飛び交う今、読書の本質とは何であろう。読書の入り口は決して一つではない。自分にとって最高の本は絶対に存在する。後世に残したいと思う本もきっと見つかるだろう。読書という樹海の中で自分を探していくこと、それこそが読書の本質ではないだろうか。過去を知ることは今を生きることに繋がる。未来を創造する力となる。そう、私が本を読むプレリュードは過去を知ることだ。

大戦から70年近く経過した今日ではあの残虐で壮絶な戦争を知る当事者も数少ない。そんな時代があったことも風化されていくかもしれない。国に命を捧げた彼らの憂いを忘れてもよいのだろうか。我々は現代の日常生活がいかに謳歌されているかも一度見直すべきだろう。歴史をifという観念で考察し過ちを理解すること。物事の裏を読み取ること。

読書、それは私にとって大樹のように感じる。張り巡らされた根には理性を、堂々と伸びた幹には感性を、幾重にも折り重なった葉には知性を宿しているだろう。

前述したように本の捉え方は人それぞれで、読書という大海原になかなか漕ぎ出すことが出来ない人は少なくない。しかし私はマスメディアが日常生活を闊歩する中、読書する喜びを是非知ってほしい。最初は書店に出かけ文庫を眺めるだけでも良いだろう。読書の素晴らしさを肌で感じ世の中に対する価値観を養うことで自分の経験に役立ててほしい。時にはあなたを感動させ、時にはセンチメンタルな気持ちにさせてくれる。路頭に迷った時には道しるべとなりあなたを支えてくれるだろう。

### 寄 贈 図 書

本学の教職員等から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

書 名		寄 贈 者
「終わらざる夏」他	計 18 冊	泉 洋成 (理事)
「人と葉の羅針盤」他	計 10 冊	三浦 雅一 (薬学部教授)
「現代中国語史新編」	2 冊	王 涵 (未来創造学部教授)
「中国民俗大系」他	計 38 冊	李 鋼哲 (未来創造学部教授)



北陸大学図書館報 NO.35 平成25年10月31日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850  
Eメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/establishment/library

※北陸大学図書館報は、大学ホームページでもご覧いただけます。

※北陸大学ライブラリーセンターは、北陸大学図書館に名称変更しました。これに伴い、『北陸大学ライブラリーセンター報』は『北陸大学図書館報』に名称変更しました。